るやうにすべし、其後我指のかさねを程よくかんがへて打時は、自然と上達し、功者も出來るものなり、

相手の癖に、ずいぶんこゝろをつけ、見出してうつときは、始終の勝をとるべし、斯のごとく心を用ゆれば、此方のすこしづゝの癖は、先の相手へは、ひとつも知れぬ道理なり、たとへをのれ上達すればとて、手のつたなき拳は、おほひに恥辱にして、人々の用ひもなし、此意をよく慎しみて、稽古する事を専一とすべし、（すべて拳によらず、何事をけいこするにも、只最初に付たる癖は、終りまで去らぬものなれば、初心のときより、よく心を用ひ、見ぐるしからぬやうにけいこすれば、上達の後にても、實に名人の場へも至るべし、）

拳をうつに、甚こゝろせかれて、氣のたつものなれば、隨分臍下にこゝろをおきて、兎角向ふ相手の、氣にもたゝぬやうにうつときは、自然人も恥て工合もよく、打にはなはだ打やすきものなり、拳をならふには、聲の調子をよくさだめ、自身の意にも應じ、よき調子は爰といふところを常々考がへ覺へをくべし、

〔拳會角力圖會下〕初拳を勝拳心得之事

初拳をかちて多く負になる事あり、これ氣のゆるむ所なり、はじめの拳に勝たるとき、負たるこころになりて、すこしもゆるめず打べし、まけたる方には大事とおもひ、ゆだんなく打、勝たる方には、すゝみすぐるものなり、夫も先が我よりいたつて弱き拳なれば追廻し、うろたへさせて取事もあれども、先へすゝみ過るはよろしからず、また我より下の拳を打ときは、わがおもふやうにゆびも出れども、我より上手の拳に向て打時は、指の自由なりがたし、こゝに習も口傳もあるべし、萬藝我よりたかき人にむかへば、常より二割も我藝のすくむものなり、是其一ッに魂のいらざるところなるべし、始からむかふの人は、我より上手ならんと、其人にのまるゝやうなこゝろにては、拳に利を得る事なし、本心を臍の下におとし付、見くだして口はうが利なるべし、あま